

ミドルリーダー養成コース

工藤 清和

教職大学院のこれまでの授業を振り返ってみます。授業は、長年研究を続けてきた研究者教員と学校や教育委員会などで実践を積み重ねてきた実務家教員がチームになって、時に熱く、時にユーモアを交えて、私たち院生の学びを広げ、深めます。理論や実践の一方に偏ることなく、理論に基づいた実践力を高めることができます。行為の中の省察を行い、自分自身の課題と向き合うことは苦しいときもありますが、今後も省察を続けて職能成長ができればという気持ちが湧いてきます。

現職教員院生と学部卒院生が共に学ぶことは、教職大学院の魅力の一つです。学部卒院生は吸収力が高いので、私の経験に基づいた発言や関わりが適切であったかどうか悩むこともありました。しかし、一緒に学ぶことで学部卒院生が実践力を身に付け、成長していく姿に出会うことは、大きな喜びになりました。実習において学部卒院生が個性を発揮し、子どもたちと真摯に向き合う姿に勇気もらっています。

実習では、子どもたちの学びを見取ることの大切さを学びました。学ぶ側の理解に沿った視点、文脈や状況に即した思考など子どもの見方・考え方を重視した授業づくり、子どもの内面を捉え、学びの過程に寄り添う校内研修が求められていると感じました。

いじめや不登校、虐待、貧困、性被害など、子どもたちの置かれている環境にも気付かされました。学校だけで解決することが難しい問題もあります。家庭や地域、関係機関（医療、福祉、行政、NPOなど）との連携を図り、協働して対応していくことの重要性を学びました。このことを踏まえ、より広い視野で学校課題や教育課題の解決に取り組んでいきたいと思っています。多面的で深い学びの場が、教職大学院だと感じています。